

「機械化」初期の頃の思い出

隅 田 雅 夫

私が京大に就職したのは昭和52年3月のことで、ちょうど「機械化」が図書館の職場に、いろいろな意味で少なからぬ影響を与えはじめた頃だったのではないかと思います。「機械化」という言葉は、図書館ではもう死語に近いものとなってしまいましたが、いわゆる「電算化」のことであり、今では「システム化」「情報化」などの方が一般的でしょう。しかしその頃は、電算化の検討委員会も「機械化委員会」と呼ばれていました。

私は昭和23年生まれですから新人とは到底言えない年齢で、いわゆる中途採用だったのですが、就職してまもなく当時の課長からCOBOLの研修に行くように言われ、私を含め3人が大阪の堂島にあったF社に2週間通勤しました。1週間は初級、1週間は中級（入門、初級だったかも知れませんが）で、私にとっては初めてのコンピュータとの出会いでしたが、プログラミングはそれなりにおもしろいものだと感じました。

当初の「機械化」は、全国的にも共通だったと思いますが、前金払い外国雑誌の予約、契約、支払等の帳票作成処理でした。いわゆるバッチ処理（これももうあまり使われない言葉ですが）方式で、数千件のデータをパンチカードで入力し、連続用紙に帳票を印刷出力するというものでした。また、プログラムも当時はパンチカードで作成していました。プログラムの1ステップが1枚のカードにあたり、プログラムによっては数百枚にもなる場合があって取扱いが大変だったことを思い出します。

これらの作業は、いわゆる全学の図書系職員数名からなるワーキング・グループ（WG）で行なっていましたが、「機械化」は、職員の間では図書館当局側が一方的に推進しているという不安があったようで、あとで聞いた話では、WGの設置や運営について職組と図書館当局とでいろいろな話し合いや交渉があったようです。私が研修のあとWGに参加した頃は、さま

ざまな紆余曲折のあとの少し落ち着いた頃だったのではないかと思います。

このような新しい技術の導入をめぐる労働現場での確執は、どんな職種においても避けられないことですが、図書館における今日の情報技術利用の目覚ましい進展を考えると、当時の職員の不安は無理もないことだったと思いますし、職員の側も情報の公開が十分にされないことの不安が大きかったのではないかと思います。

ただ、当時を振り返ってみると、図書館にとってコンピュータという新しい情報技術がどのような意味や影響をもつのか、という観点からの冷静な議論が少し足りなかったのではないかという思いもします。これはその当時に限った問題ではなく、現在も常に問われ続けなければならないことですが、そのためには、やはり新しい知識や技術を熟知し、使いこなしていく力を、集団として身につけていくことが必要なのだと痛感します。わかりきったことを今さら何を言うのかとお叱りを受けそうですが、こうして当時を振り返り、それから20余年を経て飛躍的發展をとげた今日の情報技術やネットワーク社会を思うとき、やはりそのことの重要性を改めて感じる次第です。

当時からの「機械化」の推移を回想しているとさまざまなことが頭に浮んできますが、その後もLC-MARCデータの処理や図書館専用電算機の導入などに関与させていただきました。私がコンピュータに関わってもっとも留意したのは、コンピュータ知識やプログラミング経験者の裾野をできるだけ広げて行くことと、いま現場でやっていることをいろいろな場で説明していくことでしたが、いろいろ批判も受けました。いずれにしろ、今では図書館だけでなく多くの職場で当たり前の知識・技術となってしまいましたが、やはり「機械化」初期の頃はたいへんだったなあ、というのが率直な感想です。

（すみだ まさお：元附属図書館情報管理課専門員
現三重大学附属図書館情報管理課長）